正恩寺報

平成19年9月

秋季彼岸会法要

九月二十四日

（月曜日・休日）

○ 二時

「正信偈」唱和

○ 三時

ご法話

講師

内藤知康 師

ご家族お揃いでお参りください。

一人ひとりが勤めてくださる彼岸会法要です。

正恩会

正恩寺

「母のよび声」

最近の子どもの姿を見ていると、外で遊んでいる元気な喜々とした姿を見たことがありません。交通事情の激化、テレビ・ゲーム機の普及などによる子どもの遊びの多様化にともない、室内での閉じこもりが多くなりました。昔のように、餓鬼大将を中心に、野外での園（とき）の声をあげる子どもたちの遊び姿を見ることが少なくなりました。

それに引き比べ、まったく今日の様な塾もなく、勉強と縁のない毎日に明け暮れした、自分の少年時代の頃のことが、懐かしく思い出されます。学校から「ただいま」と帰ると、「学校の予習、復習をしなさいや」という母の叱責の声も上の空、ランドセルを玄関に放り出し、夕方、鴉がねぐらに帰るまで、一生懸命に遊んだものでした。その頃になると何処からともなく、「坊よ帰っておいで」という、母のよび声が聞こえてきました。その“母のよび声”を聞いたわんぱく連中は、どんなやんちゃ者でも、一目散にわが家にとんで帰ったものでした。

その頃、昭和の初期、今のような豊かな時代ではありませんでした。ゆうげの膳には一椀の汁と一品のおかずがあれば上等でした。それでも満足して、ご飯のお代わりをして、寝たものでした。テレビも何もない、ラジオがあれば恵まれた生活でありました。そして翌朝、玄関に放り出していたランドセルを背に、学校へ行ったものでした。

そのわんぱく小僧をして、誰しも「坊よ帰っておいで」という、母のよび声”に一様にわが家にとんで帰らせしめたものは何でありましょうか。それは親心であります。“母のよび声”に親の慈愛がにじんでいたからであります。「あぁ、母さんがよんでおいでだ」とわんぱく小僧の心の中に親心が届き、つつんでいてくださっているからであります。この親心につつまれ、はぐくまれて、今日の私があると痛感する昨今であります。そのわが父母はお浄土から、どの様に私たちに呼びかけてくださっているのでありましょうか。娑婆の世界に明け暮れしている私たちの心の耳に聞こえてくる声は、わが両親も、私もつつんで下さる大悲の親様、み仏の“よび声”であります。南無阿弥陀仏のお六字は、如来大悲の結晶であります。宗祖親鸞聖人は「本願招喚の勅命」と御教示されています。ひらたくいえば、弥陀如来のよび声、如来よりの音信（おとずれ）という意味であります。

「本願」とは我々を救わんという仏の願いであり、「招」とは「まねく」、「喚」とは「よばふ」、「勅命」とは「おほせ」と釈されます。迷える私達を救おうという仏の大悲の願心より、まねき、よびかけたもうおほせが南無阿弥陀仏の六字名号の意味であります。み仏は南無阿弥陀仏と私たちによびかけることにより、仏心の真実、大悲をめぐみたもうのであります。してみれば私達が称える一声ひと声のお念仏のいとなみは、仏心を頂くいとなみといえましょう。このみ仏の“よび声”にからめとられて救われていく、お浄土への道が開かれていくのであります。

お浄土に召されたわが父や母は、往きっぱなしではありません。お浄土より娑婆に還り来て、私達をみまもり、私達がお念仏申すところ、共にお念仏を唱和して、私たちに呼びかけ、如来の大悲をあおがれているのであります。私たちの人生、世界のことを仏教では娑婆と申します。忍土という意味であります。堪え忍ばねばならぬ果てしない世界が広がっているのが、私達の娑婆・人生の現実であります。その日々の暮らしの中で、喜ばしいにつけ、悲しいにつけ、淋しいにつけお念仏して、如来の大悲を心に頂き、感謝の日々を送るところに、人間として全うする歩みが恵まれてくると頂くばかりであります。

観学寮頭　普賢晃壽

例年通り秋季彼岸会法要の準備、掃除を九月二十二日（土）朝九時からさせていただきます。お時間のある方、ご協力お願い致します。